2．高校2年沖縄研究旅行（2年度）の報告

川合勇治　長岡咲子

【抄録】 研究旅行の目的地が広島・長崎から沖縄に変更されて2年目を迎えた実践報告である。この研究旅行は、本校での平和教育の一環として位置づけられており、また、学校改革のテーマ『教育活動の総合化…国際理解と平和の教育を軸として…』を具現化する重要な教育実践である。

【キーワード】 研究旅行、平和教育（学習）、グループワーク

はじめに

本校における研究旅行は、総合学習・平和教育（学習）を目的とした実践の場である。このことは、過去の研究旅行を顧みた時、目的地が幾度か変更された中でも、一貫して保たれてきた伝統である。したがって単に観光を主眼においた修学旅行ではなく、生徒が自ら課題に取り組む場として認識を高めるために、研究旅行と称してきた。

本校では、1989年度から、学校改革（入試方法の改革、中・高6か年教育の内容や条件の整備など）に全校あげて取り組んできた。その改革の基本テーマは、「教育の総合化…国際理解と平和の教育を軸として…」と定められ、そのテーマを具現化する教育実践活動の柱として研究旅行が位置づけられた。さらに、中学3年で広島、高校2年で沖縄を、それぞれ研究旅行の目的地とし、先の戦争体験からの学習を主眼に置いて平和教育（学習）を展開することが確認された。

本稿は、このような経緯を経て2年目を迎えた高2の沖縄研究旅行の実践報告である。なお、今年度の研究旅行における研究の内容や成果は、「'91研究集録（沖縄）」として、190ページ余りにまとめられており、ここでは、研究旅行の概要および一部の資料を掲載するに留めたい。

Ⅰ、事前の取り組み

研究旅行の準備にあたって、6名の学年担任団による学年会議を重ね、教師側の分担を行い、次のような基本的方針をもって指導することになった。

1、研究旅行の基本的方針

①生徒による自主的な計画・運営の尊重

学校（教師）やツーリストが立案した旅行スケジュールに従って生徒が行動するだけの旅行ではなく、生徒の手による自主的な計画や現地での運営が行えるように、条件が許す限り、生徒の裁量に任せることとした。そのために、旅行委員会の活動や係り・研究グループの事前活動が、自主的・計画的に行えるように、責任をもって学年担任団が指導することを確認した。

②沖縄戦における戦争体験からの学習を重視

従来、研究旅行は、野外学習の場としてとらえられ、地理・歴史・文学・風俗などを中心として超教科の立場から指導がなされてきた。初年度に沖縄研究旅行の実践においても、そのような指導が行われてきた。しかし、研究旅行として沖縄へ行くことの意義を考えた時、学習の対象が広い領域に及ぶことは、十分な成果には結びつかないと考え、本年度は沖縄戦での戦争体験からの学習を旅行の中心として取り組むこととした。

2、事前の活動の概要

〔5月〕

・旅行委員会の発足

各クラスから3名の旅行委員を選出し、9名で旅行委員会を発足させた。発足にあたって、委員会の役割や生徒全体の中の位置づけ、活動方針などを確認し、具体的な活動に入った。まず、委員会内での役割分担を検討し、昨年度まで設けていた「保健係り」、「レクリエーション係り」を廃止して、研究活動を充実させるために、次のような3つの係りを設け、各々の係りを3名の委員が分担し委員長が全体を統括することとした。

（分担）	（内容）
・研究A……	全体学習、講演
・研究B……	グループ研究
・記録 ……	しおり、フィールドノート、委員会だより、研究集録

次に、研究旅行当日までの活動計画について検討した。具体的には、事前学習の時期やそのもち方、しおり、フィールドノートの作成の手順、グループ研究のテーマ設定と研究計画作成のスケジュールなどについて話し合い、さらに、委員会を週1

回定例化して行うことを決定し、旅行委員会が本格的にスタートした。

〔６～７月〕

・グループ編成と役割分担（クラス別）

研究旅行の３日目に、現地のタクシーを利用してフィールドワークを行うために各クラスでそれぞれ６班の研究グループを編成した。また、グループ内で、班長、研究Ａ、研究Ｂ、記録の役割分担を行った。（表１参照）各係りの代表者は、旅行委員とし班長連絡会の責任者は旅行委員長とした。

・読書会の設定

「観光コースでない沖縄」（高文研）をテキストとし、事前学習をスタートさせることが旅行委員会で決った。しかし、生徒がどの程度真剣にテキストに取り組むかという不安が委員会に強くあり、ホームルームで読書会をもつことになった。

・学習プリントの発行（研究Ａより）

読書会での学習をより充実させるために、研究Ａの係りからテキストに合わせて問題形式で学習プリントが発行された。そのプリントの回収と点検の作業に追われ、旅行委員は多忙を極めることになった。

この学習プリントは、夏休み中の課題も含めると20枚を超えるもので、その作成には各班の研究Ａ全員が参加し、さらに、教師の熱心な指導も加わって、かなりの力作ができあがった。事前学習を進める中で、この学習プリントが重要な役割を果たし、生徒の沖縄に対する認識を高めるために大きな貢献をした。

７月１日に発行した委員会だより“ぬちまさい”第４号には、次のような読書会の感想が寄せられている。

「集団自決がはじまり自分で死んでいく人や死にたくても死にきれない人のことを頭に浮かべると、どんなに苦しいことだったか。自分の想像以上のことが起っていたと思うと信じられません。」

「二つの洞窟のでき事が心を打った。‘生の論理’と‘死の論理’があったなら、今だからこそ‘生の論理’を選択できるが、幼いこのから自決が美とされた戦争の中では、日本人の恥というものが生きることを覆ってしまったにちがいない。真実を求めて沖縄に行きたい。」

また、この委員会だよりの最後には、「読書会のレポートや学習プリントは、旅行委員が集めてチェックするので必ず提出して下さい。㊞と押された時は再提出なので、しっかりやって下さい。」とある。旅行委員たちの自覚もこのころから、しだいに高まっていった。

・映画「沖縄戦・未来への証言」鑑賞会

学習プリントを使って読書会・学習会の回を重ねる中で、沖縄戦を具体的にイメージするために、一学期末のテスト後の短縮期間中に映画鑑賞会を設定した。暑い盛りの体育館の中、画面に映る沖縄戦の様相は、生徒諸君がテキストから学んだことを一層確かなものにしてくれた。

・グループ研究テーマの検討

グループ研究のテーマは、旅行委員会の方針で、沖縄戦に直接関係するもので、問題の設定が明確であることとされ、各グループでテーマについての検討が行われた。１学期の終りまでには、各グループから３つ程度のテーマ案が委員会に寄せられた。

〔９月〕

・グループ研究テーマの調整・決定

１学期に各グループから提出された研究テーマについて、旅行委員会で点検を行った。研究テーマは各グループで真剣に検討されたものであったが、いくつかのグループでテーマが重なっていたため、その調整にかなりの労力を費した。旅行委員と研究Ｂとの話し合いを経て、表１に示すようなグループ研究のテーマと内容に決定した。本年度のグループ研究は、沖縄戦を様々な側面から見つめることを目的として、研究の視点に他のグループにない独自性をもたせようとした点が特徴である。

・研究計画書の作成

グループ研究のテーマ決定後に、各グループで研究計画に取り組んだ。旅行委員会では、研究計画として必要な内容を検討した上で、計画書の様式を作成し、各グループに配布し提出を義務づけた。

〔10月〕

・フィールドノートの作成

旅行委員会での当初からの予定で、フィールドノートを作成した。このフィールドノートは、旅行委員を中心とした生徒の手づくりによるものであり、ノートの中には、研究Ａ（全体見学地や講演）に関する説明が日程に順じて既に書かれており、各自でグループ研究の事前学習内容・研究当日の行程・必要な地図などを記入し準備した上で、現地に持参した。旅行の当日は、フィールドノートに記録をとりながら見学や研究を行い、旅行後、グループの研究発表や研究集録をまとめる際に、

表1　沖縄研究旅行　－班編成およびグループ研究－
（▒▒は旅行委員）

組	班	班長	研究A	研究B	記録	研究のテーマ	研究の内容
A組	1班	永井	錦 後藤 河合	吉川 服部	安西	沖縄本島での沖縄戦	沖縄本島での戦争が、どのような経緯で起こったのか、また、沖縄の人々にどんな影響を及ぼしたかを探る。
	2班	長沼	森井 谷田	山田敬 山田康	佐喜 安藤	島じまでの沖縄戦	沖縄本島周辺の島じまでは、戦争がどのように展開され、住民に何が起こったかを学ぶ。
	3班	岡島	加藤 柴田	平松 三輪	名倉 犬飼	女子学徒看護隊	学童や生徒たちが、どのようにして沖縄戦に巻き込まれていったかを、女子看護隊を中心に調べる。
	4班	谷口	田中 伊藤	松浦 日比野	佐藤真 竹原	集団自決	沖縄戦での集団自決は、なぜ起こったのか。そして、それは、どんな人たちが、どのようにして行ったかを調査する。
	5班	野際	結▒城 横地美	谷▒川 和田	横地惠 森島	沖縄本島南部での悲劇	地獄の戦場といわれる南部戦線。鉄の暴風と避難民、そして残敗兵の実態について研究する。
	6班	安井覚	佐藤岳 山田哲	高木 菊城	新實 松岡	アメリカ軍の沖縄戦	アメリカ軍の作戦や戦闘を通して、太平洋戦争における沖縄戦の意味について考える。
B組	1班	荒川	稲垣 富田	葉▒山 藤野	花井 加藤千	野戦病院 －前線から送られる負傷兵－	戦場における医療の実態について、沖縄守備軍の野戦病院をてがかりに研究する
	2班	鈴木	長谷川 中野	堀江 近藤邦 渕江	橋本 大西	沖縄戦での日の丸と天皇	沖縄戦における日の丸、天皇の意味と役割について考える。
	3班	宮本	阪▒上 中原	木村 大矢	五藤 山本	軍国主義教育の影響	軍国主義教育は、軍隊や住民に対して、どのような影響をどの程度与えたのかについて調べる。
	4班	柴田	近藤倫 春日井	熊谷 畠山	加藤直 松原	戦時下の庶民の生活	戦時下におかれた沖縄庶民の家族生活や食料事情などについて調べ、沖縄戦の住民への影響を探る。
	5班	土川	三隅 花田	早川 加藤幸	片桐 久保村	国道58号線を歩く	現在の沖縄の人々に対して、沖縄戦に関する調査を行い、戦争が現在の沖縄にどう影響しているかを知る。
	6班	増井	増原 笹間	貝沼 鵜飼	今井 高▒井	沖縄戦での日の丸・君が代	日の丸・君が代は沖縄戦において何だったのか。現在の沖縄は、そのことをどう考えているのかを調べる。
C組	1班	鈴木	阪▒野 榊原	小林 加藤有	鬼頭 大脇	差別 －沖縄戦をめぐって－	沖縄戦における沖縄の人たちに対する差別の実態を研究する。また、できれば朝鮮人軍夫や慰安婦の問題も調べたい。
	2班	加藤達	折茂 石黒	池田 金城	原田章 椎葉	沖縄県立平和祈念資料館から学ぶ	平和祈念資料館設立への経緯や設立の主旨を知り、資料館での展示から沖縄戦の全体像をつかむ。
	3班	長谷川祐	原田幸 三瀬	今▒井 高木	文岡 渡辺	沖縄戦におけるアメリカ軍	沖縄戦でのアメリカ兵は、鬼畜米兵だったか。実態を調べる。
	4班	篠原	長谷 田中志 田中絵	桂川 長谷川智	杉木 森川	ガマを探る	沖縄戦の中で壕（ガマ）とは、何だったのか。そこで何があったのか、真実を探る。
	5班	山根	近藤 中根	安藤 佐藤	清水 南	庶民の沖縄戦体験	沖縄の人々の戦争体験はどんなものだったのか。生き残った人たちの人生は、その体験からどんな影響をうけたのか。
	6班	澤田	江口 後藤	石井 岩水 本田	伊藤 石▒川	沖縄戦で何が起こったのか	沖縄戦の全体像をつかみ、その特徴について分析する。

かなり有効な資料となった。今年度、しおりは旅行の生活面に関する内容、フィールドノートは研究面の内容でそれぞれ構成されている。

・学年保護者会での説明

研究旅行本番まで２週間余りと迫った10月の末、学年保護者会がもたれた。その目的は、研究旅行の説明である。“自分たちでつくる自分たちのための研究旅行”が当初からの旅行委員会のスローガンであり、保護者に対する説明は旅行委員が行うことになった。説明の分担、打ち合せ、リハーサルと、保護者会に向けて、その準備にかなりの時間とエネルギーを費したが、多勢の保護者を前にして自分たちの取り組みを語ったことは、旅行委員の自覚を高め貴重な経験となった。

〔11月〕

・事前打ち合せ会の設定と運営

旅行出発の２日前（１日前は日曜）、最後の打ち合わせ会が旅行委員会により設定された。まず、班長、研究Ａ、研究Ｂ、記録の係ごとに、旅行委員会発行のプリントを使って打ち合わせ会が行われた。その後、研究グループでの打ち合わせに入り、係り打ち合わせ事項の伝達とグループ研究に関する最終打ち合わせが行われた。

Ⅱ、実施内容（研究旅行の行程）

《１日目》11月18日(月)

９：30　職員集合
９：45　生徒集合　名古屋空港JALカウンター前、出発式、搭乗手続き
11：10　名古屋空港発　全日空303便
13：35　那覇空港到着
14：10　琉球バス乗車　出発
15：10　アブチラガマ（糸数壕）到着
　・平和ガイドの会　仲地政英さん案内と説明
　・平和セレモニー（旅行委員会）
16：10　同上発
17：10　沖縄ホテル着
18：00　夕食
19：30　講演「母親の立場で沖縄戦を体験して」
　講師　安里要江さん
21：30　旅行委員打ち合わせ
23：00　消灯・就寝

《２日目》11月19日(火)

６：00　起床
６：50　朝食
８：00　沖縄ホテル発
　バス３台にクラス別に分乗、平和ガイドの会、Ａ組に福原兼雄さん、Ｂ組に上原栄正さん、Ｃ組に平良利夫さん
８：30　嘉数高地着
９：10　同上　発
10：10　韓国人慰霊塔着
10：30　同上　発
10：40　平和祈念資料館着
11：30　昼食
12：40　魂魄の塔着
13：00　同上　発
13：10　米須海岸着
13：40　同上　発
14：00　ひめゆり祈念資料館着
　講演　宮良ルリさん
15：30　同上　発
16：00　沖縄ホテル着
16：30　那覇市内国際通り自由散策
18：00　散策終了、ホテル帰着
18：30　夕食
19：30　グループ別ミーティング（グループ研究打ち合わせ）
20：30　班長打ち合わせ
21：30　旅行委員打ち合わせ
23：00　消灯・就寝

《３日目》11月20日(水)

６：30　起床
７：00　朝食
８：30　グループ研究出発　沖縄ホテル発
　各班タクシー２台に分乗
16：00　サンコーストホテル着
　近辺の自由散策
17：30　自由散策終了
18：00　夕食
19：30　「私の平和メッセージ」作成（部屋ごと）
20：30　平和メッセージ回収
21：30　部屋長・旅行委員打ち合わせ
23：00　消灯・就寝

《４日目》11月21日(木)

６：00　起床
６：40　朝食
８：00　サンコーストホテル発
９：00　読谷村着　平和ガイドの会　浦崎メリーさん　説明
10：00　同上　発、車窓よりトリイステーション見学

10：30　嘉手納基地・安保の見える丘着
　　ガイドの説明・平和メッセージを手渡す
11：10　嘉手納基地発
11：40　サンゴセンター着　昼食　ショッピング
12：50　同上　発
13：10　那覇空港着、搭乗手続き
14：15　那覇空港発　全日空306便
16：10　名古屋空港着
16：30　解散式　JAL カウンター前、解散

Ⅲ、事後の取り組み

1、研究発表会

研究旅行終了後の11月25日(月)に、各 HR でグループ研究の発表会を行った。昨年度までは、旅行先で宿舎の大広間を使って学年全体で行っていたものである。今年度は、旅行先のホテルに生徒全員を収容できる大部屋がなかったことや、発表のための準備時間を十分確保しようとして旅行終了後に設定した。また、クラス単位で行ったのは、各グループの発表時間を従来よりも長くしようとしたためである。研究発表は、OHP を全グループが使用し、1グループ10分前後の発表であった。初年度に行ったようなコンクール形式はとらなかったが、発表内容は各グループとも大変充実したものだった。

2、高1への報告会

1月の附属の時間（木曜の6限目）を利用して、高校1年生を対象として高1の各 HR で研究旅行の報告会がもたれた。内容は、旅行委員からの旅行の概要説明とグループ研究の報告であった。来年度、沖縄へ行く高1の生徒に対してオリエンテーションを兼ねた報告会となった。

3、研究集録の作成

旅行委員が中心となって研究集録の作成作業が、12月～2月に行われ、3月に本年度の沖縄研究旅行の研究集録が完成された。

内容の構成は、次のとおりである。

○研究A　・全体見学地訪問記
　　アブチラガマ、嘉数高地、韓国人慰霊塔、県立平和祈念資料館、魂魄の塔、米須海岸、ひめゆりの平和祈念資料館、キャンプハンセン、座喜味基地、トリイステーション、嘉手納基地
　　・講演　講師紹介と講演内容の概略
○研究B　各班のグループ研究の報告
○私の平和メッセージ（全員分）
○平和宣言文
○アンケート結果

Ⅳ、反省と今後の課題

1、反省および問題点

①現地関係者との交渉、打ち合わせ

旅行の目的がフィールドワークを中心とした平和学習であるため、現地で平和ガイドの会の方々をはじめタクシー協会などの多くの人々のご協力が必要である。しかし、沖縄は色々な意味で遠い地であり、現地との連絡・調整は、はかどらない。

②研究旅行に取り組む環境づくり

研究旅行に中心的に取り組んだ旅行委員は、部活動でも中心的選手であり、生徒会活動においても重要な役割を担っている生徒たちだった。文化祭などの学校行事もこなしながらの事前の活動は、なかなか腰をすえたものにはなりにくい。教師組織の中にも沖縄研究旅行の意義について共通の認識が得られにくい状況もあり、研究旅行の取り組みをめぐっては、整備されなければならない条件が多い。

③新しい試みについて

第1は、グループ研究の内容をすべて沖縄戦に直接関係させたことである。当初、観光気分でこの旅行を考えていた生徒もあった。しかし、事前の取り組みを通して、沖縄へ行く意義・目的を旅行委員をはじめ生徒達がよく理解してくれたことによって、充実した成果をあげることができた。

2点目は、フィールドノートの作成である。今回、前年度の反省もあって、初の試みとして作成した。教師が準備したものではなく、生徒による手づくりという点が、結果としては、その利用価値を高めた。研究発表の準備や集録のまとめに際しては、大変役に立った。個々の生徒にとっても、このフィールドノートは、貴重な財産となったはずである。

3番目は、事前学習での学習プリントである。旅行委員で回収、点検を終えたプリントの量は膨大なものである。プリントの内容は、今後検討される必要はあるが、今回は、学習プリントに関わる様々な作業を通して旅行を迎える意識が高まっていった点を指摘しておきたい。

2、今後の課題

沖縄研究旅行の確たる必要性が認識されなければ、実践のエネルギーは、当然、発動されない。“沖縄を訪れることにどんな意義があるのか？”、“生徒は沖縄で何を学ぶことができるのか？”などについての認識を共有できるような論議を重ねることが必要である。

今回の旅行は、平和学習という緊張する時間の連続であったが、今後は、観光的内容や娯楽的内容をどのようにバランスよく取り入れるかを考慮し日程を作成するかが具体的な課題であろう。

【資 料 1】

平 和 宣 言 文

私たち名古屋大学教育学部附属高校２年生は、本校の伝統行事である研究旅行として平和について学ぶために、今日はじめて、この沖縄の地に立ちました。

私たちは、この旅行に至るまでに全員で、映画「未来への証言」を見たり、沖縄戦について学習してきました。また、各グループで研究テーマを決め、テーマについての事前学習を進めてきました。その中で、戦争の悲惨さや沖縄の方々の悲しみを、少しずつ理解できたように思います。

沖縄は、先の太平洋戦争において、日本で唯一地上戦を体験しました。夥しい数の砲弾が、この沖縄の地に降り注ぎ、このガマの中でも多くの方々が亡くなられました。沖縄の住民は、戦禍の中で飢えや病に苦しみ、あるいは砲弾に倒れました。アメリカ軍に追いつめられた住民は、断崖から身を投じたり、肉親同士が殺しあったりし、また、日本軍の冷酷なしうちを受け、幾多の悲劇を生んだと聞いています。私たちは沖縄戦についての事前学習をとおして、戦争で倒れるのは名もない兵隊や戦場に巻き込まれた住民であることを痛感しました。

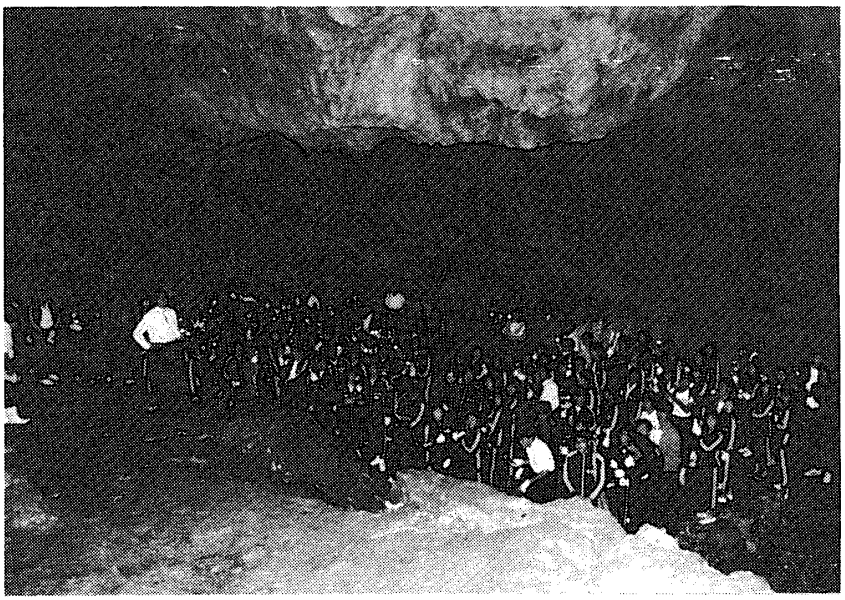
今、私たちは、物質的には豊かな社会に生きています。しかし、一見平和そうにみえる生活にも戦争へつながる多くの危険が潜んでいます。世界に目を向ければ、先の湾岸戦争や現在も続いている民族紛争によって平和に暮らせない人々がいることがわかります。また、日本に返還された今も多くの軍事基地をかかえる沖縄、自衛隊の海外派兵といった問題を考えると、平和を作りあげていく努力を、私たちの手でしなければならないと感じます。

戦争を体験していない世代の私たちが、過去の残酷な事実から目をそむけることがあってはならないと思います。戦争というものが、いつの間にか、美しく雄々しいイメージで飾られることは、恐ろしいことです。この沖縄の地で、人々がどのように戦争に巻き込まれ、命を落とし、また、憎しみあったのか、真実を知りたいと思います。

私たちは、今日から４日間、沖縄で見ること、聞くことのすべてを自分の胸にしっかり刻み、これからの人生に生かしていきたいと思います。そして、平和を脅かすものと戦い、差別を憎み、すべての人々が平和に暮らせるような世界を築くために努力を積み重ねようと、ここに決意します。

1991年11月18日

名古屋大学教育学部附属高等学校　２年生一同



アブチラガマ（糸数壕）の中で、平和セレモニーを行う（１日目）。壕内には、軍靴・弾丸・薬品・民間人の生活用品が残っている。

【資 料 2】

旅行３日目の夜、「私の平和メッセージ」と題し、それぞれの心の思いを書きつづった。

私の平和メッセージ①　　竹 原 司 朗

今回の沖縄研究旅行で、僕は、平和について、これほど考えさせられた事はありませんでした。

現在は観光地として華やかな顔を見せている沖縄も、ほんの40数年前は、まさに地獄だったという事実は今だに信じられません。

「基地の中の沖縄」といわれている沖縄ですが、他にも韓国人のこと、不発弾の処理や老人の生活保障等戦争の傷跡が今も残っています。

これらの問題が一刻も早く解決されるよう願うと同時に自分もこのことに取り組んでいかなければいけないと思います。

私の平和メッセージ②　　鈴 木 健 史

この旅行で、全く無知であった沖縄のことがよく理解できたと思う。訪ねた地で、それぞれの激戦の事を直に遺品、フィルムなどで学ぶと“沖縄県”というものが、今までの“ただ唯一、地上戦が行われたという地”という見方ができなくなってきたような気がする。確かに現在は日本の中の沖縄県でありながら本土とは隔離されていた沖縄、その沖縄が払った代償は今の私達に戦争の悲惨さを切実に伝えていると思う。

私達は、この沖縄の歴史が送ってくるシグナルを確実につかみ、これからの日本に、そして世界の平和のために役に立てていく必要があると思った。

私の平和メッセージ③　　鬼 頭 桃 子

今日（修学旅行３日目）沖縄の海に初めて触れました。とても青く澄んでいて、悪臭もなく、浜にもゴミらしきゴミはありません。

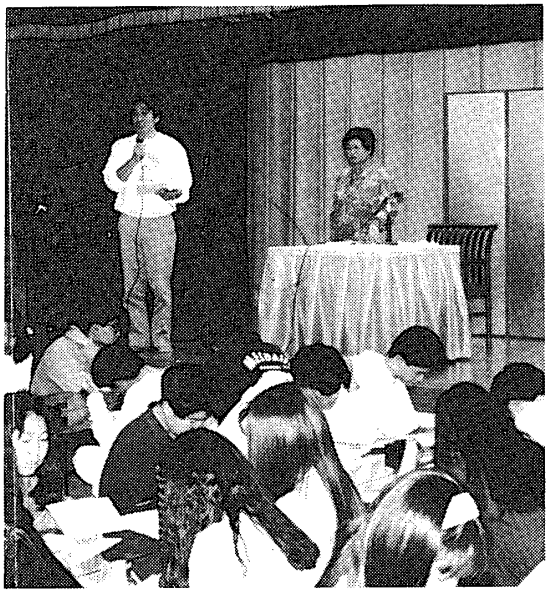
今から40数年前、この海の中に若き命が散っていったなんて、この美しい島で尊い命がうばわれていったなんて、信じられません。

沖縄に来て一番初めに行ったアブチラガマ。あの暗やみの中では「戦争」の足跡がいたるところにあったのに。軍靴の切れはし、割れた薬ビン、ベッドの柱。

自分に見えるものが、すべてだと信じることの怖さ。「真実を見て来ます」と名古屋を発った私ですが、この真実は、つらすぎました。けれども、戦争は、絶対に風化させてはならないと思います。

美しすぎる海。やさしすぎるハイビスカス。今、私達は本当に幸せな世界に住んでいます。あの暗いガマから出た時に感じた太陽の美しさ。平和のありがたさ。

忘れません。沖縄は、美しいだけの島ではありません。



安里要江さんの講演を聞く（１日目夕食後）。一人の主婦として沖縄戦の中、南部を彷徨。11人の肉親．身内が最後には２人となってしまうという悲劇を体験された。

【資 料 3】

〈研究旅行をふりかえって〉

そ の 1　　田 中 裕 子

研究旅行へ行く前、私は「何故沖縄などというお金のかかる所へ行くのか。それも観光旅行ではなく。」ということを思い、腹が立って先生に聞いてしまいました。私は、祖父母が広島に住んでいて、幼ないころから原爆ドームを見たりして戦争の悲惨さを知っているつもりでした。私は、そういう物を見るのがとてもいやでした。こわいし、気持ち悪いからです。でも行く１週間前、世界史の授業でテレビを見た時から少し考えが変わりました。「ザワワー。ザワワー…。」という歌を聞いた時、とてもうれしかったです。私はこの歌を昔からなぜか知っていました。この歌が沖縄の内容を含めた歌とは知らずに。私はとても感動しました。涙が出そうでした。その時から、「沖縄へ研究旅行として行ってみたい。」そう思いました。どの場所へ行っても感動するばかりでした。事前学習をしてよかったと思いました。一度見ただけで、ほとんど目に焼きつきました。むし暑い所でも、体勢のつらい所でも、「戦争の時は、もっと苦しい思いをしたのだろう。」と思うと何でもできました。でも全ての感動の中で、いつものあの「ザワワーザワワー。」という歌が私の中には流れていました。私はこの歌を一生忘れないで

しょう。「沖縄の研究旅行をして本当によかった。」心からそう思います。いくら高いお金をかけても、損をすることはなかったと思います。自由時間が少なかったけど何もいやなことはありませんでした。沖縄を、観光旅行で訪れなくてよかったです。どの高校の修学旅行よりもよい旅行をしたと思います。またいつか沖縄へ行ってもっと詳しく調べたいです。

その２　　加藤有美

「戦争」それが一体何になるのか、誰のためになるのか、わからない。沖縄へ行き、いろいろな物を見、聞き、肌で感じてきたが、わからなかった。沖縄の人は、本土の人に比べて多くの被害を受けたにもかかわらず、最近になって自分達も加害者なのだと考え始めていると聞いた。すごい人達だと思った。本土にいる人でさえ、被害者意識の強い人がいる。確かに原爆で多くの人が亡くなった。しかし、アジア諸国に被害を与え、本土を守るために沖縄を利用した。もっと日本人全員が戦争について考えるべきだと実感した。日本だけでなく全世界で、大きな基地を作り、毎日のように演習を行う。それが本当に、日本を守るのか。必ずしも守るとは言い切ることはできないと、嘉手納基地を見て思いました。

証言文を読むだけで、戦争を体験したくないと思いました。実際に体験した人のことを考えると、何も言うことができないと思いました。同情など相手を傷つけるだけのような気がし、だからと言って、恐しいなど第三者的な言い方もできません。ただ、とにかく二度と戦争をくり返してはいけない、と思いました。戦争をして得をするのは一部の人だけです。一部の人のために多くの命や物を犠牲にすることは、できません。私達が今後の世の中を背負っていくのです。戦争経験のない私達が、このまま一生、戦争経験のない人の住む日本に、世界になっていくように努力をしなければ、と思いました。

フィールドワークの時、一人の運転手の方が、ガイドのように説明をしてくださいました。とても勉強になったのですが、私たちのテーマである差別に必要な韓国人慰霊塔を、ご存じではなかったのが残念でした。いろんなことをよく知ってらして、東南植物園でも案内してくださいました。もう一人の方には、タクシーの中で日常的な事を教えて頂き、フィールドワークをやって、とてもよかったです。

【資料４】

その３　　畠山陽子

私は沖縄へ行き、本当にこの学校で良かったと思った。この学校に入れなかったらきっと、こんなに貴重な体験は出来なかったと思います。

数多くのお話を聞かせてもらいましたが、心が一番動いた言葉は、「被害者だけでなく自分たちは加害者でもあった」というのでした。湾岸戦争の時も思いましたが、戦争は住民が止めようと思えば止めれたかもしれない。命こそ宝と強く思えばあんな悲惨な状況にはならなかったかもしれない。一人一人が何が一番大切なのか、何が人間にとって必要なのかと冷静に考えられれば……。しかし、それは今だから言えることかもしれない。自分が、もしその場にいたら、やっぱりそんなこと考える余裕はなかったかもしれません。

また、私たちの班は知花さんのお話を聞くことができました。知花さんは「違いは違いで認め合うことが当時はできなかった」ということをおっしゃっていました。違いを認め合えば、沖縄への差別はなく、そして朝鮮への差別、東南アジアへの差別はなかった。私は韓国の友だちが沢山いるので特にその言葉が心に残った。沖縄戦で沢山の朝鮮人が死んでいった。それも一番危険な仕事をさせられて。これも同じ日本人がさせたことかと思うと、胸が痛む思いがした。日本人だということをこんなに恥ずかしいと思ったことは今までなかった。

私は文章力がないのでここにはうまく書き表わせないけれど、平和への思いは前よりもずっと強くなったと言える自信はあります。でも何よりも、これからの私たちの考え方、生き方が一番重要だということは分かっています。今回研究旅行として沖縄へ行き学んだことは“思った”よりも、それをどう生かすかに意味があるんだと思います。平和や世界にまだまだ沢山ある問題を自分の問題としてとらえ、すべてを見つめ直してみるべきだと思いました。

魂魄の塔から米須海岸へ向う（２日目）。沖縄の人々の平和を願う“遺骨の詰った塔”が魂魄の塔である。その先の米須海岸に、ひまゆり部隊をはじめ沖縄の避難民がひしめき、最期を迎えた。